

下記大会に参加した際に、九州各県の審判員から伺ったお話や、自身で感じたことなどを掲載させていただきます。ご一読いただければ幸いです。

2013. 02 内海秀昭

レフェリーレポート



【参加大会】

平成 24 年度 第 41 回九州高校選抜大会・・・平成 25 年 2 月 7 日（木）～10 日（日）

【大会概要】

宮崎市内の 4 会場を使用して開催。男子 7 チーム、女子 6 チームが全国大会への代表権を手にすることができる、各県 2 位代表チームにも大きくチャンスが広がった大会。

【大会運営】

開催地の宮崎県協会において、大会参加チームの関係者でありながら大会役員としても運営に携われ、宮崎県協会が一体となって大会運営にあたっていたことが印象的でした。

オフィシャル、コート管理は宮崎市内高校チームが担当されていましたが、ゲームにも集中しており、競技運営がとてもスムーズに行うことができました。

【審判会議での確認など】

- ・ 6～9m ラインの範囲での位置取り。ポスト、ディフェンスのプレーを判断する。
- ・ アドバンテージルールの適用・・・危険なプレーに関する罰則が帳消しになることはない。ケガ人がいることや発展性のないプレーを判断してゲームを止めることは何ら問題ない。→状況判断
- ・ フリースローのポイントの許容範囲→相手ゴールに遠い場合>近い場合
- ・ ベンチに対する毅然とした態度。クリーンハンドボールを目指す。世界基準ではベンチに対する警告は頻繁に出されている。
- ・ 基本に忠実に。

【大会に参加しての感想】

・九州各県の上級審判員は、本県に比べて若い世代が多く、これは、競技力強化の持続にとっても重要なことだと感じる。

・反則地点に近い位置取りでの判定は、ベンチにも説得力を持つ。翻って、遠い位置からの判定にならないよう、先を予測した位置取りを行うことが重要。大会3日目の男女決勝を含む3試合では、上記の位置取りが適切に行われ、流れを予測した動き方が実践されていたと感じた。

・マンツーマンディフェンスを敷いた際のレフェリーの位置取りと、前述の近い位置での判定のバランスを崩さないよう、ペアでの役割変更を臨機にできるように。

・ブロック大会を多く経験することが重要。県内大会とは違った雰囲気を経験することは、多くの視点から自身のジャッジを見直すことができる。

・審判員は自信を持つこと（過信ではなく）。そのためには数多くの試合を吹笛して、多くのシチュエーションに慣れることで、臨機にも対応できる経験を養う。

・チームから信頼されるレフェリング → 一貫した判定、罰則の明確な適用、ベンチと適度にコミュニケーションをとる。

・ベンチからのレフェリーに対しての要求には、毅然とした対応をとる必要があると感じる。試合序盤で判断できない場合、終盤の勝負所で同じ行為があっても警告に留まる可能性があり、結果として罰則の効果が効かない場合がある。

・県内の若手審判員にも、早い段階で上級を目指していただきたい。審判員の技量向上が、県内チームの競技力向上に相乗効果があると信じている。

自身の体験から、審判員の養成はある程度の期間が必要だと感じており、審判員を目指す（若しくは“やってみてもいいよ”くらいでも）現役プレーヤーが増えるよう、方策を考えたい。